Who was SAVE?【完結】

Lesser

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

本作のオリキャラを、スマホのアイビスペイントＸで頑張ってみました

救われたのはＡｓｒｉｅｌ？　それともＣｈａｒａ？

Ｗａｓ ＳＡＶＥ Ａｓｒｉｅｌ？　Ｏｒ Ｃｈａｒａ？

それともまさか

Ｍａｙｂｅ；；

目次

第1話　Who was fallen?（誰が落ちた？）――1
第2話　A new family member（新しい家族の一員）――4
第3話　They are moving（みんなで引っ越し）――7
第4話　Planning filed（計画失敗）――11
第5話　Secret is uncovered（秘密が明かされる）――15
第6話　Bell is…（Bellは…）――19
第7話　The end?（終わってしまうの？）――23
第8話　True end（これで本当に終わり）――27
裏設定とかいろいろ――31
UNDERBELL ～the another story～――38
RIDERTALE～予告～――42
Pルート――45
［＊Do you take the "TRUE RESET"?］――48
ほんとにほんとの作者さんの独り言（見たくない人は見なくてよし）――53
StoryShift ～What the meaning of "Bell"？～――58
Amalgamates――60
UnderSwap！「swapping the world：

Merry X'mas! ―― 66
凸 ―― 63

第1話　Who　was　fallen？（誰が落ちた？）

『むかしむかし、ちきゅうにはニンゲンとモンスターというふたつのしゅぞくがいました』
『ところがあるとき、ふたつのしゅぞくのあいだにせんそうがおきました』
『そしてながいたたかいのすえにニンゲンがしょうりしました。ニンゲンはまほうのちからでモンスターたちをちかにとじこめました』
『それからさらにながいときがながれ……』
『今、〝のぼったらにどともどれない〟エボット山はそのふういんのうえにあるとされている』
　それは、今どきの子供であれば誰であれ知っているお伽話だ。
　まぁ、私の場合はよくあるように親から聞くわけではなく人づてに聞いたのだが。
　ともかく、エボット山に登ったら戻ってこられないというのが重要なのだ。それ以外は特に重要なことじゃない。登ったら戻ってこないという事はきっとその山の中で死んだのだろう。つまり、エボット山には死ねるだけの何かがあるという事だ。
　私はそれを求めてこれからエボット山に登る。当然、こんなことは誰にも言えない。……いや、言っても相手にされないと言った方がいいのか。アイツ一人だけはそれなりに考えてくれそうだが、それでも言う必要はない。

　そう思って飛び下りてから結構な時間がたった。私は今、詳しい経緯は私にもわからないがモンスター一家に引き取られた…いや、養子に取られたのか。

始めこそ死に損ねたことを嘆いていたが、今はそこで無理に死ぬことを選ばなくてよかったと思っている。そうしなかったから私は今こうして血のつながりはないが、幸せなモンスターの家族の一員として生活ができている。

この地下にいるモンスターは基本的にいいヤツしかいなかった。アイツから聞いたような戦争のことだって引きずっているとは思えないほどだ。……いや、あの王様が根回ししたおかげで私のようなニンゲン相手でも取り繕ってくれているのだろうか。

けれど、すくなくとも目の前にいるこいつだけはニンゲンへの恐れなんて微塵もないのだろう。

「あれ？　あそこにいるのってもしかして……ニンゲン？」

だからすぐ隣からそんな声が聞こえてきたときにはとっさにそいつを庇い、目の前にいる倒れたニンゲンを警戒した。

そして私が警戒するのを待っていたかのようにして人間が体を起こす。そこにあったのはそれなりに見た顔だった。多少変わってはいるが、それでもほとんど変わっていない顔だった。

「う……ゴホッゲホッ。あ、生きてたんだ。よかった……」

「お前、なにしてるんだ」

自分が生きていることに心底安堵しているようなソイツに向けた言葉は冷たいものだった。やはり、私は未だにニンゲンへは憎悪を抱いているようだ。

まぁ、それもそうか。ニンゲンがいたおかげで私はここにいるが、それで許せるほど甘くはないし、達観もしていない。

「あ！　Ｃｈａｒａ！　よかった、無事だったんだね…。なんでエボット山に登ってるのさ！　〝登ったら戻れない〟ってボク言ったよね！」

「ねぇＣｈａｒａ、知り合い？」

最初は安心したように笑っていたが、途中から半ば怒るようにまくし立てられ、後ろからは少し怯えた様子で質問が飛んでくる。まぁ、やはり私の知っているアイツだったようだ。心配して損した。

けれどなんでこいつがここにいるんだ。私じゃあるまいし、こいつ

がここに来るような理由なんて何一つあるはずがないのだが。
「とりあえずお前はどうしてここにいるんだ」
「……落ちて来たんだよ。Ｃｈａｒａを探して」
そう言われてから、そいつは二っと歯を見せて笑う。今気づいたが目に軽くクマがあるところを見るに相当真剣に探していたようだ。すでに数か月は経過しているというのに。それだけたったら私のような子供は死んでいると考えるべきだろう。というか、アソコのニンゲンならみんな私がいなくなったくらいでは何も思わないはずだ。
本当に、こいつだけが例外なんだ。アソコで私にまともに話しかけてくるのはこいつだけだったし、きっと後ろにかばっているＡｓくらい考えなしだったのだ。こいつは。
「とりあえずＡｓ、そのニンゲンはＢｅｌｌ。逆にこっちはＡｓｒｉｅｌだ」
一先ず簡単に互いを紹介してから…そうだな。やっぱりマ…Ｔｏｒｉｅｌにも言わないといけないだろうな。
私を探して落ちてきたニンゲンまで増えるなんて、いよいよもってＨｏｍｅが手狭になるな。

第２話　Ａ　ｎｅｗ　ｆａｍｉｌｙ　ｍｅｍｂｅｒ
（新しい家族の一員）

私がＢｅｌｌをマ…Ｔｏｒｉｅｌに紹介してからさらにいくらか時が過ぎた。気が付けばＢｅｌｌは持ち前のコミュニケーション能力でいつの間にかモンスターたちとも仲良くなっていた。

この間もパ…Ａｓｇｏｒｅとよく話している研究者と話をしていた。あいつは地上にいたころから頭の回る奴だったから気に入られたのかもしれない。それともただの研究対象として見られているのかだが。

だが、モンスターたちとの遊びをしていて魔力弾まで出てきたときにはさすがに肝を冷やした。どういう言うわけかあいつはひらひらと躱していたが、それでもいい心地ではなかった。あの後マ…Ｔｏｒｉｅｌに怒られたのは私の告げ口ではない。

ないのだ。

「それで、今日はどうするの？」

「ああ、パ…Ａｓｇｏｒｅ王に私たちで作ったパイを食べてもらうんだ」

「ちゃんとママからレシピ貰ったんだよ！」

それはいいねと新しく私たちＤｒｅｅｍｕｒｒ家に加わったＢｅｌｌ改めＢｅｌｌ　Ｄｒｅｅｍｕｒｒは答える。

それからも私たちは他愛のない話をしながら材料を求めて歩き続ける。基本的な材料はすでに揃っているので、後はレシピにある金色の花を手に入れればいいのだが、中々見当たらないのだ。

金色、というくらいだからすぐ見つかると思ってマ…Ｔｏｒｉｅｌにも生えている場所を聞いてこなかったのは失敗だったらしい。こんなことならＡｓに流されることなくちゃんと聞いておくべきだったな。

「花、ってことなら多分日の当たるところじゃないか？」

「太陽か……」

「あ！　そういえばＣｈａｒａとＢｅｌｌの落ちてきたところに花が生えてなかった？」
「「あー、生えてた」」
　なぜだか声が重なってしまい、それを見てＡｓがクスクスと笑う。私は笑っているＡｓを小突くが、それを見て今度はＢｅｌｌが笑いだす。
　このままＢｅｌｌを小突いたら今度はまたＡｓが笑うのだろうと私は仕方なく拳を収め、記憶をたどって落ちてきた場所へと向かう。だがその途中でパ…Ａｓｇｏｒｅの育てているのと同じ形をした金色の花を見つけた。
「Ａｓ、Ｂｅｌｌ。あれかな？」
「あれってパパが育ててるやつだよね」
「食べれるから育ててたんだ」
　私たちはＢｅｌｌの食べられるから育てたという言葉に納得し、深く考えずにその花を持ってきたナイフでいくつか刈り取ってＨｏｍｅに帰ることにした。
　ちなみに私は装備としてナイフを選んだが、Ａｓは木の棒（お気に入りらしい）をＢｅｌｌは地上の家から持ってきたらしい鞄を持ってきていた。Ｂｅｌｌのバッグに詰められていたチョコレートで雪崩を起こした時は大喜びしたものだ。すぐ後にマ…Ｔｏｒｉｅｌに隠されて管理されてしまったが、毎日チョコレートを食べられる生活は至福の期間だった。
　そしてＨｏｍｅに帰った私たちは早速調理に取り掛かり、パイを作ったのだが、あのパ…Ａｓｇｏｒｅの育てていた花にはどうやら毒があったようでパ…Ａｓｇｏｒｅが数日ほど寝込み、私たちはマ…Ｔｏｒｉｅｌに盛大に叱られることになった。
　しかし、今回のことでこの今のＨｏｍｅでは手狭になってしまっているとマ…Ｔｏｒｉｅｌとパ…Ａｓｇｏｒｅの中で話し合いがあったらしく、今度はＮｅｗＨｏｍｅと言えるところに引っ越すことになった。
　なんでも基本的なつくりは一緒らしいが、一部屋一部屋が広くなっ

ているらしい。個人的には今のこのＨｏｍｅが気に入っているからそれはありがたかった。
　Ｈｏｍｅの地下から通路を通ってＳｎｏｗｄｉｎに出て、Ｗａｔｅｒｆａｌｌ、Ｈｏｔｌａｎｄと続いてＮｅｗＨｏｍｅに向けて歩く。その道中で興味深い石碑を見つけたのでメモを取ったりしながら私たちはＮｅｗＨｏｍｅを目指した。
　――ニンゲンのような強いソウルがあればモンスターは底知れぬ力を得られる。
　きっと、人間のソウルがいくらかあれば結界すらも破壊できるのだろう。つまり、ここにいるモンスターたちを地上に出すことができる。こんな薄暗い地下でなく、日の当たる暖かい空の下で暮らすことができる。そうだ。そうなったほうがいいんだ。
　だって、こんなにも優しい彼らがこの狭苦しい地下で暮らして、彼らよりもずっと狡猾で残虐なニンゲンが日の下にいるというのはおかしいだろう。
　本当なら逆であるべきなのだ。逆であれば、きっと世界はもっと平和になる。きっと、今のニンゲンたちが起こしているような戦争もなくすことができるだろう。
　……幸い、ニンゲンのソウルはある。あとはこれをどうやって取り出すのか、どれだけ必要なのか…それと誰に渡すのかも考えないといけないな。
　これからはそれなりに忙しくなりそうだ。

第3話　Ｔｈｅｙ　ａｒｅ　ｍｏｖｉｎｇ（みんなで引っ越し）

私があの戦争碑を見てからそれとなく行動を始めた。勉学に興味を示したフリをしてＷ．Ｄ．Ｇａｓｔｅｒ…あのＢｅｌｌやパ…Ａｓｇｏｒｅ王と話しているアイツに付きまとい、純粋に疑問に思ったようにしてこの地下世界にあるバリアの強度を知りたいなどと聞いた。

そしてそれを壊せるだけのエネルギーはあるのかとも。結論として、Ｗ．Ｄ．Ｇａｓｔｅｒはそれなりに乗り気になって調べ始めた。乗り気になるのが早かったから聞いてみたらＢｅｌｌも似たような質問をしてきたらしい。

詳しく聞いてみたら大体『今のニンゲンは魔法を使えないのになんでバリアが張れたのか』だそうだ。それでＷ．Ｄ．Ｇａｓｔｅｒはバリアを構成するエネルギーについて調べ始めていたらしい。私とは少し毛色が違うが、似たような質問だったから片手間でなくちゃんと調べてみようとのことだ。

けれど、考えてみれば確かにＢｅｌｌの質問も気になる。魔法の力で結界を張ったのならばなぜ今のニンゲンに魔法が使えないのだろうか。マ…Ｔｏｒｉｅｌのようにコンロを使わず魔法の火で料理をして明かりをともし…そういうことが誰でもできるのならば当たり前のように今でも魔法が使われているはずだ。

それだというのに今のニンゲンは魔法を使えない……。使えるニンゲンと使えないニンゲンがいて力が薄くなったのか？　いや、だとしても戦力を落とすようなことは普通しないだろう。結界を張ったのはニンゲンじゃない？　いや、それこそあり得ないか。

この辺りは長く生きているらしいパ…Ａｓｇｏｒｅ王にでもそれとなく聞いておけば解決するだろうか。あの性格だから強情に聞こうとしたら答えてくれるとは思うのだが。

Ａｓは聞いていたり…しないだろうな。していたら多分私に言い

に来るだろう。
「それで、研究はどうなってる？」
「ああ、それなら大まかな結論は出たよ」
今は勉強と称してＷ．Ｄ．Ｇａｓｔｅｒの研究所で話を聞いていたのだが、もうすでに結論までたどり着いたらしい。私と入れ違いになったらしいＢｅｌｌの質問はまだらしいが。
わかったことは二つ。一つはニンゲンのような強いエネルギーを秘めるソウルが７つもあればバリアを完全に破壊できること。ただしただ抜け出るだけならば一対一でいいらしい。
しかし地下世界にいるモンスターは結構な数だ。それだけのソウルを集めるよりは誰かが外に出て７つ集めた方が楽だろう。
「Ｇａｓｔｅｒ博士はやってみる気は」
「ないね」
「……だよね」
わかってはいたが、この男は本当に自分の興味があることにしかやる気を出さないらしい。いまではニンゲンのソウルに秘められたエネルギーが何かを研究しているらしいが。
……まさか、私やＢｅｌｌを使っての実験とか考えていないだろうな。もしもそうだったら私は有能な研究者のツテを一つ失うことになる。
しかし、Ｗ．Ｄ．Ｇａｓｔｅｒでダメとなれば私の友好関係からして大分選択肢は絞られるな。パパやママはだめだろう。Ａｓはそもそも論外だしな。一体どうしようか。いや、まずもってニンゲンのソウルをどう渡すかだよな。まさか殺させるわけにはいかないから偶然を装わないといけない。
偶然…病気とかだろうか。しかしこの地下世界で大分暮らしてきたが病気なんてしたことがないぞ。そもそもママが病気になるような生活を許さないだろう。病気…なにか菌でもあれば起こせるのだろうが何かないか…。
「……金色の花」
そうだ。あれがあった。あの花を食べたパパが大分弱ったんだ。

モンスターよりも弱い私たちニンゲンだったら…それも子供ならすぐにでも死ぬことになるだろう。後はソウルを取り込んでくれる協力者だな。

私にもＢｅｌｌのようなコミュニケーション能力があればすぐに候補が上がったのだろうが、そんなことを嘆いている間はない。できることならばすぐにでも彼らを外に出さなければ。

一人外に出して外でソウルをいくつか見繕って手に入れ、そしてバリアを破壊する。そうすれば彼らは外で暮らすことができる。

「――――」

誰かが話しかけているようだが、今はそんな余裕はない。思考を回せ。考えろ。どうすればいいのかを。

「――ｒａ！　Ｃｈａｒａ！」

ふと、耳元で自分の名前を呼ばれていることに気づいて顔を上げる。それで見えたのはＢｅｌｌの銀色に輝く瞳だった。

その近さに驚いて跳び退くが、跳んだ先でＷ．Ｄ．Ｇａｓｔｅｒと話していたＡｓにぶつかる。そのままバランスを崩してＡｓを下敷きにして転んでしまう。踏んだり蹴ったりだ…なんて思いながら起き上がり、Ａｓに手を伸ばす。

Ａｓに私の手を取らせてからグッと引っ張り上げる。どうやら思考に集中しすぎて二人が来たことにも気づかなったらしい。心なしか疲れが増している気もする。

こんな時にはチョコレートを食べたいが……そういうわけにもいかないのだろうな。そうおもって吐いたため息をどうとらえたのか、Ｂｅｌｌはポケットからアメを取り出して私に差し出してくれる。

「はいコレ。ボクが貰ったんだけど…ちょっと今日は食欲がなくてさ」

「……」

なんとなく向けてくる笑顔が見れなくってそのアメを無言で受け

取って口に放り込む。不思議な味だが、マズくはない。

第４話　Ｐｌａｎｎｉｎｇ　ｆｉｌｅｄ（計画失敗）

あれから、またしばらく経った。結局のところ協力者として挙げられるのはＡｓｒｉｅｌしかいなかった。私の友好関係の狭さが実に憎たらしい。

そして次にあの金色の花を取りに行くまでがとてつもなく長かった。

そもそもあの花はＨｏｍｅ近くに生えていたのだ。それを取りに行くためにまたＨｏｔｌａｎｄ、Ｗａｔｅｒｆａｌｌ、Ｓｎｏｗｄｉｎと歩き続けなくてはならなかった。

Ｗａｔｅｒｆａｌｌを抜けると急に寒さが来るのでそこはあらかじめ着込んでいくことにしたがそうしたら今度はＨｏｔｌａｎｄが辛かった。途中でバッグ抱えて寝て休んでいるしているＢｅｌｌとすれ違ったが、まともに話している余裕はなかった。寝苦しそうだったが、地面が石のところで寝るからだ。

「やっと着いた……」

パ…Ａｓｇｏｒｅ王の庭園から取ってもいいが、何となくそれは嫌だった。だからこうして取りに来たんだ。

刈り取ったそれをポケットに入れて来た道を引き返す。ブンブンと手に持ったナイフを空振りさせるほどに気分は高揚していた。

そんな気分はＨｏｔｌａｎｄですぐに萎んでしまったのだが。Ｂｅｌｌの奴はまだ寝ていた。

あれからより計画を念密にして、ようやく実行しようとした時だった。口に入れようとした金色の花をＢｅｌｌの奴が奪ったのだ。

「ダメだよＣｈａｒａ。この花には毒があるんだ」

「知ってる」

「……Ａｓｒｉｅｌ、なんで止めなかったのさ」

「もう何回も言ったけど、Ｃｈａｒａは変わらなかったから……」

私への説教は態度からしてか早々に諦め、今度はＡｓに質問をする。けれど帰ってきたのは流されやすいＡｓらしい答え。それを聞いてＢｅｌｌはため息を吐いてから再度顔をこちらへ向ける。

きっと、私へ雷が落ちるのだろうな。もしかしたらママにも言われて計画が頓挫するかもしれない。それは避けたいが……。Ｂｅｌｌの回避能力は相当だ。捕まえるのには相当な苦労をすることになるだろう。

「なんで、そんなことをしようと思ったの？」

「……え」

「Ｂｅｌｌ……止めないの？」

私は怒られるとばかり思っていた。だからＢｅｌｌから理由を聞く質問が飛んできたときには思わず呆けた声を出してしまった。

変わりというようにＡｓが聞くけど、それにＢｅｌｌは何となく困ったように笑いながら私の頭に手を乗せる。

「Ｃｈａｒａのケツイの硬さはよく知ってるんだよ」

顔を見なくてもわかる。今のこいつはきっと笑っている。それもさっきの困った笑いじゃなくてきっと昔を思い出すような笑い方だ。

実際、何度か見たことはあった。Ａｓにせがまれて地上の話をするときは決まってそんな顔をしていた。

前に見た光景を思い出して、もう見れないことを理解していて。そんな楽しいけれど悲しい、微妙な顔だ。そんな顔は、あんまり好きじゃなかった。

「地上じゃあＣｈａｒａってばボクが食べ物渡そうとしてもチョコレート以外受け取ってくれないんだもの」

「キミから施しを受けるほど弱くなかったから――」

「そんな意地っ張り相手にそれなりに一緒だったからね。Ｃｈａｒａが本気でやってるのかくらいはわかるよ」

私の言葉をまるっきり無視してＢｅｌｌは話を続ける。何度か抗議の声を上げるがそれでもＢｅｌｌは止まらなかった。

そしてＡｓは私の昔話が聞けて辱めを受けている私の様子を見て楽しさと恐ろしさが半々といった様子だが、好奇心が勝るようで止め

ることはない。
「わかった、話すからもうやめて」
「そうこなくっちゃ」
　ＡｓはＢｅｌｌの作戦に気が付いていなかったのか、驚いたような声を上げていたが意趣返しにそのＡｓの声を無視して事の経緯を話し始める。
　そして一通り話し終えたところでＢｅｌｌから一言。
「まぁ、そんなことだろうと思ってた」
「ええっ!?　Ｂｅｌｌ知ってたの？」
　まぁＣｈａｒａがＷａｔｅｒｆａｌｌでメモ取ってるの見てたしとＢｅｌｌは話す。確かに私はＢｅｌｌの目の前でメモを取っていたのだったか。これは失敗だったかもしれない。
　いや、もしかしたら私と同じようにＷ．Ｄ．Ｇａｓｔｅｒに頼んだ内容を聞いたのかもしれない。……いや、目の前のこいつにそこまでの思考はないはずだしあるとしたらＧａｓｔｅｒの余計なお世話か。
「で、自分のソウルを使って結界を……ねぇ」
　スッとＢｅｌｌは目を細めて私を睨む。Ａｓはようやくが本気で怒っていることに気が付いたのかオロオロとし始めた。しかしＢｅｌｌが怒っているのはわかっていたが、まさか冷静に怒るタイプだとは思わなかった。Ｂｅｌｌは賢いが情に厚いし、てっきり激情に駆られて怒鳴ると思っていたのだけれど。
　結果として私はＢｅｌｌにこってりと絞られることになった。大まかな内容としてはどうして自分にも言わなかったのかという事だったが。
　言ったところで止められるのが目に見えている上に説得も手間がかかりそうな相手だったんだ。話さないのは当たり前だろうと言ったせいでさらに説教が伸びた。
「これは没収するからね。Ａｓｇｏｒｅ王にも言って二人が手に入れられないようにするから」
「チッ、また探し直しか」
「ちょっとＣｈａｒａ！」

思わず零した舌打ちを拾われたせいでＢｅｌｌの睨みがより強くなる。だがそれでも私は引くわけにはいかないんだ。ここにいる皆を地上に出すために、私は止まれない。

「Ｃｈａｒａ。キミが死んだらボクもＡｓｒｉｅｌも…ＴｏｒｉｅｌもＡｓｇｏｒｅ王も悲しむんだ。絶対に止めてくれ……頼むから」

最後にそう付け加えてからＢｅｌｌは出ていった。けれど次の方法を考え始めた私には聞こえていなかった。聞いていれば、あんなことにはならなかったのかもしれないのに。

第５話　Ｓｅｃｒｅｔ　ｉｓ　ｕｎｃｏｖｅｒｅｄ
（秘密が明かされる）

私が新しい方法を考え始めてからというもの、Ｇａｓｔｅｒとの勉強会へ行ける頻度が減り、パ…Ａｓｇｏｒｅ王の庭園へ行くにも必ずＢｅｌｌ達の監視が着くようになった。

夜中に行こうとしても王国騎士団に話を通されるという徹底ぶりだ。これではいよいよもって毒という手段が使えなくなるかもしれない。

そう思って焦り始めてから、私は少しずつこうなった原因であるＢｅｌｌに強く当たるようになっていた。

すれ違っても話しかけられても何も返さず、Ａｓと二人きりで遊ぶようになった。Ｂｅｌｌはそんな私の行動を見るたびに仕方がないとでも言いたげに笑って、離れていくようになっていた。

Ａｓは私たちのそんなやり取りを見ていてどうにかしようとしていたらしいが、実を結んだことは一度もない。

なのに、今日はなぜだかＢｅｌｌに直接呼ばれて私はＢｅｌｌと二人きりで話すことになってしまった。

これまでずっと避けてきた相手と真正面から向き合って話をするという事に少し緊張のようなものを……いや、私はこいつに怒っているんだ。緊張なんてしていない。

「それで、話って何」

どうにか切り出せたのはそんなぶっきらぼうな言葉だった。

けどＢｅｌｌはそんな私の態度を何とも思っていないようで、一切反応せずに答えてくれた。

「計画を諦めるつもりはないんだよね」

答えというよりは、質問に質問を重ねるだけだが、私にとっては答えだった。こいつはよりにもよって私に計画を諦めるように説得に来たのだ。

「ない。絶対に止めない」

だから私はそう即答した。なんなら考えるよりも先に言葉が出ていた。それを聞いてＢｅｌｌは一度目を瞑り、そしてもう一度開いた。
「ニンゲンのソウルを手に入れるために……Ｃｈａｒａ自身のソウルを使ってＡｓｒｉｅｌを外に出すの？」
「そうだよ」
そっか…とＢｅｌｌはどこか遠くを見るようにしながらも答える。
そして、さっきよりも覚悟…Ｂｅｌｌ風に言えばケツイの固まった目で私にまた質問を始める。
「必要なのはニンゲンのソウル一つだけなんだよね」
「そうだよ」
「ボクがあの時に言ったことは覚えてる？」
「覚えてる」
「ニンゲンのソウルなら、誰のでもいいんでしょ」
「うん」
そんな問答に私はイライラを募らせていた。確信を突かない回りくどい質問に私は飽き飽きしていた。
だからＢｅｌｌに聞いたんだ。
「何が言いたいの？」
って。そう言ったらＢｅｌｌは少しの間考えるように動きを止めてからもう一度口を開いた。けれど今度は下を向いていた。
「Ｃｈａｒａ。お願いがある」
「……何」
なんとなく、聞いちゃいけないって思った。けどここまで来て引き返すわけにもいかなくって私は聞いた。
聞いて、しまった。
「ボクのソウルを使って欲しい」
きっと、私はその瞬間に相当間抜けな顔をしていたことだろう。自分でもそんなことが分かるくらいに私は放心していた。
「なんでそんなこと言うのさ」
「ボクは…Ｃｈａｒａを助けるためにここに来たんだよ」

ああ、確かに地下で最初にあった時はそう言っていた。
「けど、ここでの暮らしにＣｈａｒａは満足してた」
そうだ。確かに私はここにいるみんなと過ごしていたい。
「それで、Ｃｈａｒａが皆を外に出したいっていうのなら」
……。
「ボクが、協力するから。だからＣｈａｒａはみんなと笑い合って、時々喧嘩したりして、幸せに暮らすべきだ」
……。
「Ｃｈａｒａは地上にいい思い出はないだろう？　だから、地上にはボクが行くよ」
……。
「Ａｓｒｉｅｌにだってニンゲンを殺させたりなんてしない」
……。
「大丈夫、Ｇａｓｔｅｒ博士に話は着けてあるんだ。ボクを好きにしていいから、代わりにボクのお願いを叶えてって」
……ッ。
「Ｇａｓｔｅｒ博士が今ニンゲンのソウルについて調べようとしてるのは知ってるでしょ？　それにボクを使っていいからって」
……やめてくれ。
「Ｃｈａｒａを助けるためにボクはここに来たんだ。だからＣｈａｒａ」
……やめてよ。
「ボクに」
いやだ。
「救われて？」
「やだ」
そう口に出せばＢｅｌｌは困ったように笑う。その顔は地下でもう随分と見ていたものだ。
「じゃあ、諦めてくれる？」
「……」
何も言わない代わりに首を横に振ってこたえる。

「じゃあ、ボクを使ってよ」
「……！」
もう一度、今度はより激しく首を振る。
地上で話しかけてくれるのはＢｅｌｌだけだった。地上で私のことを見てくれたのはＢｅｌｌだけだったんだ。
Ａｓやパパ、ママは大事だけど、同じくらいＢｅｌｌも大切なんだ。だから、ダメ。そんなことはさせない。させられない。
「……、ゴホッゴホッ」
「Ｂｅｌｌ……？」
「ああ、ごめん。もともと体は強くなくてさ」
アハハとＢｅｌｌはまた困ったように力なく笑う。確かにＢｅｌｌは冬の間は私のところに来なかったし、それ以外でも来ない時があった。
体が弱いのはきっと本当だろう。この地下に来てからも誘いに乗らない日は少しだけれどあった。……私が一人で金色の花を取りにいった時も、確か普段ならそんなことしないはずなのに地面で寝ていた。
けど、それがどうだっていうんだ。
「地上に、いた時からさ。大人になる前に死ぬって、言われてたんだ」
「え……？」
「Ａｓｒｉｅｌ達には話せてないんだけど…Ｇａｓｔｅｒ博士には言ってある」
待って。何を言っているの？　何を言うつもりなの？
「ボクが死んだら、Ｇａｓｔｅｒ博士はボクのお願いのためにニンゲンのソウルを研究してくれる。……博士は、絶対に約束を破らないからさ、その時まで待っててよ」
私を見るＢｅｌｌの瞳は微かに揺れていた。

第6話　Ｂｅｌｌ　ｉｓ・・・（Ｂｅｌｌは…）

Ｂｅｌｌの告白を聞いてから私は否応なしにＢｅｌｌのことを意識することになった。

私と一対一で話してから当たり前だがＢｅｌｌはさらに弱っているらしい。少なくともＡｓに弱みを見せることはないが、それでも事実を知っている身からしたらどうしてもわかってしまう。

ふとした時に倒れそうになっていることがあるし、最近では食べる量も減っているように思う。

「う……」

なんとなしに気晴らしに外に出てみても目の前で壁に体を預けている姿を見ることになった。今もＢｅｌｌは目の前にいる私にも気づかないで荒い息を繰り返している。

「Ｂｅｌｌ……」

私から思わず零れた声を拾ったのか、Ｂｅｌｌが私の方を見上げるがその目は前に見た時以上に揺れている。まるで、何を見ているのかわかっていないかのようだ。

「あぁ、Ｃｈａｒａ。どうしたの？　こんなところで」

こんなところ、というのはここがＷａｔｅｒｆａｌｌの滝に隠された小部屋だからだろうか。その体じゃあＨｏｔｌａｎｄすら苦痛であるはずなのに、一人でここまで来たのだろう。

私はともかく、Ａｓはこの場所まで中々来ない。そして今Ｂｅｌｌがいるところには不自然に赤いなにかが床にへばりついている。

よくよく見てみればＢｅｌｌの口元も少し赤くなっている。口を切ったのか、はたまた血を吐いたのか。その二択の答えはわからないがすでに体は限界に近そうだ。

『ボクが死んだら、Ｇａｓｔｅｒ博士はボクのお願いのためにニンゲンのソウルを研究してくれる』

Ｂｅｌｌの言葉が思い出されて思わず顔をしかめる。Ｗ・Ｄ・Ｇａｓｔｅｒ……あまり、信用できていない。研究をすることとバリアを潜り抜け、人間のソウルを集めることは別だ。きっとＢｅｌｌは藁

にも縋る思いだったから気づかなかったんだろうが、私は気づいている。
　言うべきだろうか。言ったところで、どうにかなるのか？　言ったらＢｅｌｌは死ななくなるのか？　そんなはずはない。だからこそＢｅｌｌのソウルを使うことが最も合理的だと考えている自分がいる。
　そして、そんなことを考える自分に反吐が出る。
「……」
「安心、してよ。Ｇａｓｔｅｒ博士には、ちゃんと外に出て、ニンゲンの、ソウルを集めて、バリアを壊す、っていってた…だから」
　もう長いこと話すこともできないのか、セリフは途切れ途切れだった。
　私は、どうすればいい。そう考え始めるがどうすることもできないことを悟っている私には何もできない。
「大丈夫だよ、Ｃｈａｒａ」
　私の心でも読んだみたいにＢｅｌｌが優しく話しかける。
「ボクは、ちゃんと、そこにいる」
　そう言って遅々と持ち上げられた腕で指されたのは私の胸。そこに飾られた私とＡｓ、Ｂｅｌｌ、ママ、パパで撮った写真が入っているハートのロケット。
　Ｂｅｌｌも、Ａｓも同じものを身に着けている。言ってしまえば血のつながりのない私たちの絆の象徴。つながりを示すそれ。
「Ｂｅｌｌ……」
「フフ……ああ、ごめん。そろそろ帰ろうか」
　Ｂｅｌｌは柔らかく笑ってからどうにか立ち上がって壁に手を突きながら歩き始める。見ていられなくて肩を貸して、また歩き始める。
「ありがとう、Ｃｈａｒａ。やっぱり、君は優しいよ…」
　言わなくてもいいことを話しながらＢｅｌｌは歩く。その歩幅は年下の私よりも小さなものだ。
　それに合わせて歩くものだから普段よりも早く出たのに、普段帰る

のと同じような時間になってしまった。途中何度か倒れかけていたのでＢｅｌｌ一人だけならきっとこれよりも遅れていたのだろう。
「ねぇ、Ｂｅｌｌ……」
　死なないで。多分、私はそう続けようとした。けれどその言葉は声にはならなかった。
「あ、Ｃｈａｒａお帰り！　ってＢｅｌｌ、どこか怪我でもしたの…？」
「あぁ、さっきまで寝てたせいでまだ眠くって……」
　さも本当にさっきまで寝てましたと言わんばかりにＢｅｌｌは自分の目をこする。声色だって普段となにも変わっていない。
　変わっていないのだ。瞳以外、何も。変わっていないように見せられている。きっと話すまで私にもそうやって偽っていたのだろう。
　Ａｓも家族なのだから、パパやママだって悲しむから。そう言ったらＢｅｌｌは彼らに話してくれるだろうか。言ったところで彼らは反対して、Ｂｅｌｌのソウルを誰にも渡さないように保管することになるだろう。
　きっと、Ｂｅｌｌの遺体もずっと近くに置こうとする。Ａｓは毎日のように眠っているＢｅｌｌのところに通うのだろう。パパはあの金色の花を眠るＢｅｌｌの周りに咲かせるかもしれない。ママは…きっと、眠り続けるＢｅｌｌに話しかけて、バタースコッチシナモンパイをＢｅｌｌに渡す。
　私は、どうするだろうか。
　私は多分……Ｂｅｌｌのソウルを――
「Ｃｈａｒａ？　ボーっとしてどうしたの？」
「……何でもない。Ｂｅｌｌを運ぶのに少し疲れただけ」
「じゃあＢｅｌｌは僕が支えるからＣｈａｒａは休む？」
　Ａｓは、本当に優しい。Ｂｅｌｌは私に対して優しいと言ったが、優しい奴は間違っても親友のソウルを使うなんて考えないだろう。
　……やっぱり、私は優しくなんてない。むしろ最低な部類だ。地上にいるニンゲンと変わらない……。
「Ｃｈａｒａ。それは、違う」

「……」

Ｂｅｌｌはもうロクに見えてもいないだろう瞳で私を見ながら告げる。

けれどその言葉も私は信用できない。ほら、やっぱり私は最低な奴じゃないか。

第７話　Ｔｈｅ　ｅｎｄ？（終わってしまうの？）

Ｂｅｌｌの病気がついに家族のみんなにも気づかれた。Ｂｅｌｌが倒れたところにパパとママが居合わせたのだ。

当然そこに私もいたが、誤魔化すよりも先にママがＢｅｌｌの症状に気が付いた。

そしてその場にいなかったＡｓも倒れる音を聞きつけてやってきて、ママからの説明を受けて知った。

「どういうことなの……」

「なんで、あの子が…」

「僕、Ｂｅｌｌと遊んでたのに気づかなかった…」

「……」

順にママ、パパ、Ａｓの発言だ。私は無言を貫いた。

口を開いたら、私は全部を話してしまいそうだった。Ｂｅｌｌに聞いたことを全部。ソウルを使った計画のことまで全部。

それを言ってしまったら二度と彼らを地上に送るチャンスがないことをわかっているから何も言えなくて、でも言ってしまいたくて。

私は初めて心の底からＢｅｌｌを恨んだ。こんなことならば知りたくなかった。知らなかったら私はこんな気持ちにならなくてすんでいたのだ。

知らなかったら、私はＢｅｌｌのソウルを使うなんて思いつかなくて済んだのに。

「ねぇ、Ｃｈａｒａは大丈夫なんだよね…？」

もし地下にきたニンゲン全員がＢｅｌｌのようになるとしたら、そんなことを考えている心底不安げな顔でＡｓが私に問いかける。

私はやはり無言で頷くだけにして答えた。

その後訪れた重い沈黙に私は耐えられなくなって、口を開こうとした時だった。

「ボクも、大丈夫、だよ」

明らかに回復していないだろう体を壁に支えてもらいながらＢｅｌｌが部屋に入ってきたのだ。

どうにかして普段通りに立って笑おうとしている姿を見たけれど、見ていられなくって私は服を掴む自分の手を見た。
ママは立ち上がってＢｅｌｌに抱き着いたようだ。Ｂｅｌｌのいたあたりから声を抑えて泣く声が聞こえる。
Ａｓも、パパもそれに習ってＢｅｌｌを抱きしめたのか近くにあった気配がすべて遠ざかる。
それがまるで私の未来を言い当てているかのように思えて、けれど私は動けないでいた。
「Ｃｈａｒａ」
たったの一言、Ｂｅｌｌに名前を呼ばれて少しずつ顔を上げる。Ｂｅｌｌは優しく笑っていた。そうして、私に手を差し伸べていた。
私はその手を取ってＢｅｌｌを引き寄せる。Ａｓ達には聞こえないように小声で文句を言い続けた。
どれだけ強い言葉で罵ってもＢｅｌｌは私の背を優しく叩いてくれていた。まるで子供をあやすみたいなことだったけど、私はそれを続けられるうちに勢いを失ってしまった。
そして言葉が無くなったとわかると今度はＢｅｌｌは私の頭を撫でてくる。ママが私にしてくれているみたいに。
「Ｂｅｌｌのバカ……」
どうにか、泣きそうになりながらもそれだけは言えた。本当にＢｅｌｌはバカだ。計画を私に話したらどうなるのかを知っているくせに話したり。
こうして、自分のソウルを利用する奴に優しくしているんだから。本当に、Ｂｅｌｌはバカだ。
けれど私はこうしてそのバカにいいように扱われている。本当なら私はカンカンに怒っていたはずだ。けれど今私の心の中にあるのはどうしようもない混ざり合った感情だった。
さっきから、Ｂｅｌｌの手は滑り落ちるみたいに私の髪を撫でては重りでもつけてるみたいにゆっくりと上がって、また落ちるように撫でるを繰り返している。
この行動すら負担にしかならないのだ。けれどそんな行為を私に

してくれているという事が嬉しい。けれどこれも近いうちに無くなってしまうという悲しさがある。
なんでこんなことをしたんだって言う怒りもある。Ｂｅｌｌと一緒に居られて楽しかった思い出が駆け巡っている。
全部が全部混ざり合って、でも混ざり切らずにそれぞれが主張して。私の心はかき乱されている。他の誰でもない、Ｂｅｌｌに。
「ホントに、バカ……」
ついに腕が持ち上がらなくなったのかＢｅｌｌはもう撫でてくれない。体を預けるみたいに私に体重が少しずつかかっている。
私だけじゃ支えきれない。けどＡｓ、ママ、パパもＢｅｌｌを支えてくれる。ついに体を全部預けられてから少しの間そのまま固まっていた。
そしてＢｅｌｌの入ってきた扉からまた別のモンスターが現れる。Ｗ．Ｄ．Ｇａｓｔｅｒ…Ｂｅｌｌの協力者だ。けれど、私はこいつにＢｅｌｌを渡したくない。Ｂｅｌｌのソウルをこんなよく知らない奴に渡したくなんてない。
けど、それがＢｅｌｌの望みだったから。仕方なくＷ．Ｄ．Ｇａｓｔｅｒが Ｂｅｌｌのソウルを見ることを許した。
Ａｓも、ママもパパも無言でそれを見つめていた。きっと、初めて見るのだろうニンゲンのソウル。
キラキラと光を受けて七色に色を変える透明なソウル。Ｂｅｌｌの純粋さを表してるみたいで、本当にきれいだった。
「……。出直すとしよう」
それだけポツリと残してＷ．Ｄ．Ｇａｓｔｅｒは立ち去った。ママとパパはＢｅｌｌの体をよく腰かけていた木のそばで眠らせてあげようと提案して、ＡｓがＢｅｌｌを埋めることに反対した。
私は、Ｂｅｌｌのソウルを胸に抱えながら動くことができなかった。動きたくなかった。動かなかったら時間も動かないと信じて、動くことをしたくなかった。けれど現実はいつだって非常だ。
「Ｃｈａｒａ。Ｂｅｌｌのソウルもちゃんと一緒にしてあげよう」
「……うん」

すごく、すごく長い間答えることを考えなかった。けど答えなきゃいけなくてちゃんと答えた。Ｂｅｌｌのソウル。透明で、七色に輝くソウル。

それは、とってもきれいだった。そんなきれいなソウルをＢｅｌｌの胸に抱えさせてから棺桶に入れて、埋める。

けれど夜が明ける頃にはＢｅｌｌの胸にはハートのロケットだけしか残されていなかった。

第８話　Ｔｒｕｅ　ｅｎｄ（これで本当に終わり）

［＊Ｉ　ａｍ　ｆｉｌｌｅｄ　ｗｉｔｈ　Ｄｅｔｅｒｍｉｎａｔｉｏｎ．］

ボクは死んだ。ボクの望む形で。

そして死んだボクのソウルはＧａｓｔｅｒ博士に好きにしていいって言ってある。そもそも、ボクはバリアを壊すつもりなんてないんだ。

ただ、Ｃｈａｒａに幸せに生きていて欲しかっただけ。だからＣｈａｒａのソウルを使わせないためにボクのソウルを使ったフリをして、足りないことを演出してもらった。

さらに研究の為に使ってニンゲンのソウルにあるエネルギーもなくなったことにしてしまえば地下世界にあるソウルはＣｈａｒａの持っている一つだけになって、地上へ出ることができないってことになる。

「つまるところ、ボクはただＣｈａｒａに地下世界にいて欲しかったのさ」

ＣｈａｒａはＡｓｒｉｅｌとＴｏｒｉｅｌとＡｓｇｏｒｅというＤｒｅｅｍｕｒｒ一家の中で幸せにその生を謳歌しました。この物語の終わりはそれでいいんだ。

それだけができていればいい。その中にボクは必要ない。

「そもそも、ボクは異分子だからね。大方、これを見ている君たちの願いによって生まれた…ってところかな」

そして、その願いをこの物語の書き手が組み上げて、Ｐｌａｙｅｒとして持っているＣｈａｒａへの縁（糸）を使って、さらに観測を安定化させるための楔としてボクを打ち込んだ。とはいえ、縁（糸）をたどる以上Ｃｈａｒａ視点でしか見れていなかったようだけれど。

それも、ボクが近くにいる間って言う限定的な状況だけ。それだけ限定的だったから、どうにか異分子（ボク）を打ち込むことはできた。

しかし世界は異分子を排除しようとする。その結果がボクの病弱。

「もっとも、Ｇａｓｔｅｒ博士に頼んだ毒薬を飲んで死を加速させた

のはボクだけどね」
　ボクを地上に戻そうとするためにかＣｈａｒａが想像以上に早くＧａｓｔｅｒ博士を訪ねていた事を知った時は冷や汗をかいたよ。
　そんな感じで紆余曲折あったが、ボクは計画をちゃんと実行できた。Ｃｈａｒａの計画を挫折させるという計画を。そして君たちはボクという楔を失ったからもうＣｈａｒａを覗けない。
　当然だろう。キミたちみたいな最低な存在がＣｈａｒａを覗くなんて許されないんだから。
「楔を再び打ち込もうとしても無駄さ。あのｔｉｍｅｌｉｎｅ（世界）はすでに対策を立てた」
　だから、今更楔を作っても無駄だって言葉を重ねる。
「Ｃｈａｒａは穏やかな生活を得られた。Ａｓｒｉｅｌの親友は死ななかった。Ａｓｇｏｒｅは人を殺す選択をしなくてよくなった。Ｔｏｒｉｅｌは心を痛ませなくともよくなった」
　Ｃｈａｒａが生きている間にニンゲンが落ちてくることはないから、Ｃｈａｒａのソウルと合わせてバリアを通り抜けるなんてことにはならない。ソウルを使わないからＣｈａｒａは死なない。
　そしてＣｈａｒａが死なないからＡｓｇｏｒｅとＴｏｒｉｅｌは落ちてくるニンゲンを見守る選択をできる。
「そして、Ｇａｓｔｅｒ博士はニンゲンのケツイを研究できる。……もっとも、楔であるボクのソウルにケツイがあるのかはわからないけれど」
　他のモンスターたちには悪いけれど、外には出すことができないかもしれない。けれど、それでいいんだ。
　確かに地上に出られれば彼らは本当の自由を得られるかもしれない。けれどそこには常に悪意がある。ニンゲンは違いを許容できない。
　だから……もしかしたらまた戦争が起きるかもしれない。今度こそモンスターが根絶やしにされるかもしれない。けれど、地下に居ればそれはない。
「これこそが完璧なＨａｐｐｙ（ハッピー）　Ｅｎｄｉｎｇ（エンド）なんて、押しつけがま

しいかな」

Ｃｈａｒａはもしかしたらボクが死んだことを悲しんでくれるかもしれない。傷ができていることを知っていながら何もしてこなかったこんな無能が死んで、Ｃｈａｒａはどう思ったのだろうか。

Ａｓｒｉｅｌ達Ｄｒｅｅｍｕｒｒ家は悲しんでくれたんだろうな。もっともこれ死が計画されていたとされる証拠は残してないから大丈夫だろうけど。

ところで…と自分の内側に言葉をかける。

「いつまでボクを覗いているつもり？　もうここに臨むものはないはずだよ。というかボクの中から物を見るのをやめてくれないかな」

Ｂｅｌｌは体を突き破って内側にある存在を掴んで追い出した。

追い出された存在はＢｅｌｌの近くに浮遊し続ける。

「これも入れ物……どれだけ遠くから見ているのだか」

自分の周りを浮遊し続ける物質を見て呆れるようにＢｅｌｌはため息をついて、改めてこちらを見る。

「これは警告だ。間違ってもＣｈａｒａたちの幸福を邪魔するな」

白銀に輝く瞳が溶ける。

「ボクはまだ抱いているんだ。Ｃｈａｒａ達の幸福を守るっていう作られたものじゃない、本物のケツイを」

瞳に続いて体も溶ける。

「君達がなおも観測を続けようとあがくって言うのなら――」

世界が白と黒に染まる。溶けた瞳で見定められる。溶けた瞳に輝く白銀の焔がともる。

「Ｂａｓｔａｒｄｓ（あんたらみたいな屑は） ｌｉｋｅ（に） ｙｏｕ（が）…

ｈａｖｅ（は） ｔｏ（ッイに） ＳＩＮＫＩＮＧ（沈む） ｉｎ（が） ＲＥＧＲＥＴ（いさ）・」

［＊Ｂｅｌｌ（Ｂｅｌｌ） ｉｓ（は） ｆｉｌｌｅｄ（ケッイに） ｗｉｔｈ（ッイ） Ｄｅｔｅｒｍｉｎａｔｉｏｎ（満たされた）・］

［＊Ｂｅｌｌ（Ｂｅｌｌ） ｉｓ（は） ｆｉｌｌｅｄ（ケッイに） ｗｉｔｈ（ッイ） Ｄｅｔｅｒｍｉｎａｔｉｏｎ（満たされた）・］

［＊Ｂｅｌｌ（Ｂｅｌｌ） ｉｓ（が） ｆｉｌｌｅｄ（ケッイに） ｗｉｔｈ（ッイ） Ｄｅｔｅｒｍｉｎａｔｉｏｎ（決意が） ａ（溢

「間違っても二度と戻ってこられないように、この器だって破壊する」
本来ケツイに耐えられるはずの器が溶けて原型が無くｎａってｉく、
ｋａｎそｋｕをきｒａれｒｕ.
「――、――――」

［＊Ｅｒｒｏｒ.］　［＊Ｅｒｒｏｒ.］　［＊Ｅｒｒｏｒ.］

［＊ｔｈｉｓ　ｓｈｏｒｔ　ｓｔｏｒｙ　ｉｓ　ｔｈｅ　ｅｎｄ.］

裏設定とかいろいろ

このＳＳの世界のキャラクター

Ａｓｒｉｅｌ

♂。ぐう聖。天使。かわいい。

もふもふしてて癒し力がとても高い。

装備は木の棒とハートのロケット（金色）。

Ｃｈａｒａ

♀。悪戯好きだが普通の少女。自己評価が低い（周りに言われ続けた罵倒による後天性）

体には消えかけている傷があったりする。

ソウルの色は赤。

装備は本物のナイフとハートのロケット（メタリックな赤色）。

最高にカッコイイしかわいい（１番大事）

Ｔｏｒｉｅｌ

みんなのマッマ。名前しか出ず、セリフも一切なかった。

Ａｓｇｏｒｅ

かわいそうな王様。扱いは妻とおんなじだった。作者はただひたすらにＡｓｇｏｒｅがＢＧＭに合わせてタオルでとある個所をこする動画を見てからまともに見れなくなった。あとその動画のせいでせっかくの神イントロが台無しになった（因果応報）

Ｗ．Ｄ．Ｇａｓｔｅｒ

研究者。ちゃんと約束（本人的には契約）を守った。ケツイについての研究は結構進んだ。なお作中ではちゃんとした言語で話した模様。

当然ケツイ抽出装置は作られたのでこの地下世界ではＣｈａｒａではなくＢｅｌｌのケツイを用いてＡｍａｌｇａｍａｔｅｓ（アマルガメイツ）が作られることになるだろう。

Ｂｅｌｌ

オリキャラ。性別不明。Ｔｒｕｅ（最終）ｅｎｄ（回）に入ってからようやく

自分が模造品だと気づいた。Ｃｈａｒａを助けることが存在意義なために大分人として歪んでる。体は比較的弱いが、運動はできる。
体の弱さは異物を感知した世界がＢｅｌｌの影響を抑えるためにそう歪めた。
ソウルは光を乱反射するクリアな色。本来ならばただの無色透明なソウルであるはずだったが、本物のケツイが宿った結果として色が付いた。ちなみに死んでソウルが体から出たのは本来のソウルでないため体との繋がりが弱かったから。
模造品であるがためにケツイはＣｈａｒａやＦｒｉｓｋと比べて弱いため、セーブもロードもリセットもできない。
一応はニンゲンの肉体をしているが、死体であるために強大すぎるケツイを抱けば体は崩壊する。（モンスターよりかは耐性がある）
ケツイの過剰供給時は瞳から溶け出し、白銀の焔がともる。もし戦う場合は溶けた体を使って攻撃をしてくる（ＨＰ最大値を減らしての攻撃）だろう。攻撃してソウルを砕いても無理やりくっつけられる（ＨＰ最大値は下がる）鬼畜使用。攻撃を避け続けて体を全部使わせるまで待つか復活させ続けてＨＰ最大値を０にするかしかない。はっきり言ってクソゲーになる。
装備は破れたバッグ（持ち物枠が２つ増える）とハートのロケット（銀色）。
名前の意味は祝いの鐘。あとＡＢＣトリオにしたかった。
第１話の伝説が原文と違った理由
ＯＰの落ちた子供のボーダーが１本なのと、Ｇ√でＮｅｗｈｏｍｅのカレンダーを調べた時の描写から２０１Ｘ年はＣｈａｒａの落ちた年であると考えたため少し変更した。あと２０１Ｘ年って明らかにフレーズとしておかしいからってのと、子供の記憶のため内容が曖昧だったものをＣｈａｒａなりの解釈で原文らしい形にしたものである為。
前書き、後書きについて
日本語の方はＦｒｉｓｋをイメージ。英語の方はＳａｎｓ。斜体で取り消し線のついていた理由は下の方に。

Ｔｒｕｅ（最終）ｅｎｄ（回）について

Ｂｅｌｌのいた場所は生と死、あるいはＴｉｍｅｌｉｎｅ（世界線）の狭間。Ｇ√時のＣｈａｒａのいた場所と似てるだけで別の場所。そこにいたＢｅｌｌは役割（ロール）としてではなく、自分の意志、ケツイに従って審判者となった。それすらも作者（わたし）に仕組まれたものだとあの子は知らない。

審判を受ける対象はＢｅｌｌの存在した世界を覗いていた存在全て。ただ前書き後書きに書かれていた世界よりもＳＳとして覗いている存在の方が多かったため、そちらに向けた言葉になった。誰よりも審判を受けるべきは作者（わたし）なのにだ。

このＳＳで出てきたの英文（一部）

サブタイトルは特別な翻訳なし。単純な英文だからそのまま翻訳してもいいと思う。前書き後書きなんかは一応訳は置いておくが参考程度でおｋ。むしろ違う解釈を教えてください。よりイイのあったらそっちを推したい。

タイトル

Ｗｈｏ　ｗａｓ　ＳＡＶＥ？　訳：誰（だれ）が救（すく）われた？

前書き

まんま。ただし「…」の後は想像にお任せ。

第１話　Ｗｈｏ（誰）ｗａｓ（が）ｆａｌｌｅｎ（落ちた？）？

Ｉｓ　ｔｈａｔ　ｔｒｕｅ？　訳：ほんとうにそうか？

第２話　Ａ（新）ｎｅｗ（しい）ｆａｍｉｌｙ（家族）ｍｅｍｂｅｒ（の一員）

Ｒｅａｌｌｙ？　訳：マジなのか？

第３話　Ｔｈｅｙ（みんな）ａｒｅ（で）ｍｏｖｉｎｇ（引っ越し）

Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ｂｅｇｉｎｎｉｎｇ　ｏｆ　ｔｈｅ　■■■

訳：ここが■■■の始まりだ。（個人的にはここがターニングポイントだな。の方が好き）

第４話　Ｐｌａｎｎｉｎｇ（計画）ｆａｉｌｅｄ（失敗）

Ｉｔ　ｗａｓ　ｌａｔｅ．　訳：そいつはもう遅いな。

第５話　Ｓｅｃｒｅｔ（秘密）ｉｓ（が）ｕｎｃｏｖｅｒｅｄ（明かされる）

Ｉ ｃａｎ ｎｏｔ ｓａｙ ａｎｙｔｈｉｎｇ．　訳：オイラはなにも言わないぜ。

Ｉ ｄｏｎ’ｔ ｋｎｏｗ．　訳：（オイラが）知るかよ。

第６話　Ｂｅｌｌ（Ｂｅｌｌは…） ｉｓ…

Ｗｈａｔ ｗｅ ｓａｉｄ，　訳：なにか言ったところで…

Ｈｅｈ，ｉｔ’ｓ ｔｏｏ ｌａｔｅ．　訳：ヘッ、今更遅いっての。

第７話　Ｔｈｅ ｅｎｄ（終わってしまう）

Ｈｅｙ ｋｉｄ．Ｒｅｔｕｒｎ．　訳：おいガキ、戻るぞ。

Ｄｏ ｗｈａｔｅｖｅｒ ｙｏｕ ｗａｎｔ．Ｉ’ｍ ｇｏ ｂａｃｋ ｈｏｍｅ．　訳：好きにしろ。オイラは帰るからな。

第８話　Ｔｒｕｅ ｅｎｄ（これで本当に終わり）

Ｗｈａｔ ｄｉｄ ｙｏｕ ｓａｙ？　訳：なんて言った？

Ｈａｈ：Ｉｔ’ｓ ｓｏ ｆｕｎｎｙ ｊｏｋｅ…　訳：ハハ…。そいつは随分と笑える冗談だな……。

本文に出たやつ

「Ｂａｓｔａｒｄｓ ｌｉｋｅ ｙｏｕ… ｈａｖｅ ｔｏ ＳＩＮＫＩＮＧ ｉｎ ＲＥＧＲＥＴ．」

言ってる時はこんな感じかな？なおルビは《あんたらみたいな屑は…後悔の海に沈むがいいさ。》だが直訳では《あなたのようなろくでなしは後悔しなければなりません。》になる。

Ｓａｎｓの「Ｋｉｄｓ ｌｉｋｅ ｙｏｕ… Ｓｈｏｕｌｄ ｂｅ ｂｕｒｎｉｎｇ ｉｎ ｈｅｌｌ．」的なのにしたくてない頭をひねって頑張った。”Ｓｈｏｕｌｄ ｂｅ”だと「～するはずだ」という直訳になるので、もっと子供らしく直接的にしたかったため”Ｈａｖｅ ｔｏ”で「～する必要がある」に変更。

一部大文字はＳｔｏｒｙ ＳｈｉｆｔのＣｈａｒａから。Ｂａｄ ｔｉｍｅ ｔｒｉｏカッコいいよね。

Ｉ ａｍ ｆｉｌｌｅｄ ｗｉｔｈ Ｄｅｔｅｒｍｉｎａｔｉｏｎ．とかのは大体ルビの通りでいい。

このＳＳの地下世界

Ｕｎｄｅｒｔａｌｅの世界線で幽霊のような存在だった（多分意識だけの存在とかそういうの）Ｃｈａｒａと対話しながらＰ√へ行ったＦｒｉｓｋだが、エンディング終了時にＣｈａｒａが消えてしまう（Ｆｒｉｓｋの自意識がはっきりと固まったため追い出されて消滅？）

そんな経験を得てＦｒｉｓｋがＡｌｐｈｙｓやＳａｎｓ達の協力を得てタイムマシンを作成、自然死（寿命などでの死）したニンゲンの死体に疑似ソウルのようなモノを突っ込んでできたニンゲン擬きをＣｈａｒａを救うため過去に入れたというもの。

ただしこの時、ニンゲン擬きが過去へ着いた時点で未来が変わるため、タイムラインがＦｒｉｓｋのいたものから分岐する（世界線が変わる）ことになる。そのためニンゲン擬きが入った時点で縁のあるＣｈａｒａ視点でしか見ることができなくなった。

Ｃｈａｒａ達を覗いていたのはＢｅｌｌの中に埋め込まれた機械をアンカーとして信号を受信していた。本来ならＢｅｌｌ視点になる予定だったようだ。

タイムマシン作ったほうのキャラクター達

Ｃｈａｒａ

♀。やっぱり最高にかっこいいしかわいい。

意識だけの存在だったがＦｒｉｓｋに憑依するような形で同棲（体の主導権はＦｒｉｓｋ）。Ｐ√を経て自意識がはっきりしたＦｒｉｓｋの肉体に居られなくなり、消滅。

世界線が変わったためにＳＡＶＥされない一番の被害者。

Ｆｒｉｓｋ

♀。ぐう聖。天使。かわいい。

Ｃｈａｒａと百合百合しつつ一緒に地下を回っていた。Ｃｈａｒ

ａの過去を聞いてから、他のモンスターのようにＣｈａｒａもＳＡＶＥしたいとケツイ。その後研究者たちとタイムマシンを作成して作られたＢｅｌｌを過去へと送る。因みに名付け主はこの子。Ｂｅｌｌが死体であることは知らず、協力してくれる被験者として紹介された。そのためＴｒｕｅ（最）（終）ｅｎｄ（回）ではＳＡＮ値がかなり減った。ついでにＬＯＶＥも上がったかもしれない。

前書き、後書きの日本語を喋ってた。

Ｓａｎｓ

♂。カッコいい骨。ツクテーンはやる。

Ｆｒｉｓｋに頼み込まれて断り続けるがケツイの固さに負けて研究者に戻りタイムマシンを作成。タイムラインについても結構ちゃんと知れたので割と満足。

疑似ソウルは亡きＧａｓｔｅｒの遺品かもしれない。けど死体使うって決めたのはこいつ。あまりＦｒｉｓｋ以外のニンゲンを信用していない。

前書き、後書きの英語の方。斜体で取り消し線が付いていたのはＰｌａｙｅｒとの縁（糸）がほぼほぼないため。しかし縁（糸）の強いＦｒｉｓｋへの言葉なので一応描写はされた。

Ｔｏｒｉｅｌに頼まれたのもあってＦｒｉｓｋのセコムになってる。

Ｂｅｌｌが自分のことに気づいてから内心Ｆｒｉｓｋが気づかないかと焦りまくってた骨。ＳＡＮ値を結構持っていかれた。

Ａｌｐｈｙｓ

名前だけの登場（しかもこの話だけ）

Ｃｈａｒａたちの未来がハッピーエンドに終わるのかをあなたが完璧に知る手段はない。妄想するか創作を書くしかないようだ……。

［＊あなたはこの物語のあり得たかもしれない別の未来を想像し、ケツイに満たされた。］

「I say ”don’t look”, right? I’m very angry…」

「GO BACK JUST NOW! AND DON’T RETURN!!」

UNDERBELL ～the another story～

分岐条件

UNDERTALEと同じ行動をChara及びAsrielが行う。(Bellが二人を止められなかった場合)

NewHomeに引きこもるためNルートの場合は交流は一切ない。P√、G√での限定キャラ。

一周目P√

(時系列的にはAsriel戦のすぐあと)

[＊後ろの扉から人影が伸びる。]

「そんな…Bell…。どうして、出てきたの?」

「Asriel…。Why don't you use my soul…?」

[＊唯一取り込まれなかったニンゲンだ。]

「う、あ……」

[＊Asrielは狼狽えている。]

「You receive my soul…

You don't back flower, right?」

「Bell… no… no…」

[＊Bellのケツイは固い。]

「Please…

I don't want to be alone again.」

「Bell……」

[＊RESET]

二周目G√

（Sans戦後、セーブは直前で強制的にされる）

「Howdy. I meet you again, Right?」

「＊Bell is remember before.」

「hah… Ignore it?

So being tough.」

「＊Bell is so… idiot. Cause is smiling.」

「You look like… wanna have the wasted time.《あんたは、無駄な一時を過ごしたいみたいだね》」

「＊Bell is filled with Determination and you are filled with Determination too.」

「ah… so…

It's a better day outside.」

「＊Bell is filled with Determination.」

「Doesn't hear those voice, "flower" is crying」

「＊Bell is filled with Determination.」

「On the days like these,」

「＊Bell is filled with Determination and overflows.」

「Bastards like you…

Should be SINKING in REGRET.」

・・・

「I remember timeline at all《ボクはこれまでのタイムラインを全部覚えてるんだ。》」So you don't need my "MARCY"《キミにはボクからの"MARCY"なんて必要ない》Right?」

[＊FIGHT]

「Hah…that's right.」

[＊Keep "FIGHT".]

「Don't let me attack that face…」

「I remember your "MARCY".

Please…stop to "FIGHT".」

[＊MARCY]

99999999999

.　.　.　.

「…I use the "SPECIAL ATTACK"!!」

.　.　.

「Hah…never hit…」

［＊FIGHT］

99999999

「Ah…Long time no see, Chara and Asriel…」

［＊Bell cannot see anything.］

「Let's play with me…outside.

or bake cake?」

［＊Bell is smiling gently.］

「Heh…

It will get mad at Toriel but…

so good.」

［＊LOVEが上がった！］

ＲＩＤＥＲＴＡＬＥ－予告－

「じゃあ、始めよう」
「Ｆｒｉｓｋ、少しは付き合わされる身にもなってよね」
「まぁまぁ、Ｃｈａｒａってばそんなこと言わなくていいでしょ。ほら、構えて」
「なんでニンゲンはこの状況で騒げるの……」
「へへ…王子サマでもこれには圧倒されるのか。とはいえさすがにこの数はオイラも骨が折れるかもな。スケルトンだけに」
　辺りには見渡す限りの敵の陰。その中心にいながらその５つの陰は背中を合わせ円陣を組んでいた。
　多少の不安が見える顔ぶれはあれど、そこに恐怖なんてものはまるでない。この人数が集まれば絶対に勝てると、全員が信用しあっている。
『ＧＲＥＡＴ！　ＡＬＬ　ＭＡＲＣＹ！』
『ＢＯＴＴＬＥ　ＺＵＢＡＮ！　ＣＲＯＳＳ―Ｚ　ＫＮＩＦＥ！』
『ＤＥＴＥＲＭＩＮＡＴＩＯＮ　ＪＥＬＬＹ』
『ＭＯＮＳＴＥＲ　ＳＯＵＬ　ＥＶＯＬＵＴＩＯＮ！』
『ＤＡＮＧＥＲ　ＳＫＥＬＥＴＯＮ』
「「「「変身！」」」」
　５つの影が打ち合わせなんてしていないにも関わらずにはっきりと声を揃えてそう口にする。
　変化はすぐに表れる。
　全体的に白く、カラフルなラインが描かれる戦士が、手にナイフを持った赤い瞳を持つ戦士が、胸にケツイを抱いた戦士が、白を中心にあしらい、六色に分かれる戦士が、伝承にしか現れないような青い炎を燃やすスケルトンとなった戦士が。
　それぞれ、姿を現したのだ。
　彼らこそ、ヒーローである。
　その名も……仮面ライダー。
　あるいはありとあらゆる存在を助けるために。

あるいは殺戮を許さぬがために。
あるいは戦いに身を投じる友を想って。
あるいは自らの国の未来のために。
あるいは託されたものの願いを背負って。
それぞれの考えがあれど、全ては誰かの為に戦い続ける。

「……ボクじゃ、ここまでが限界か」
戦士である以上、当然あり得ることだ。
「ごめん、Ｃｈａｒａ。約束破るよ」
『ＤＥＴＥＲＭＩＮＡＴＩＯＮ　ＷＡＶＥ！』
ＡＲＥ　ＹＯＵ　ＲＥＡＤＹ？　そう問いかける音声が鳴り響く。
「――できてるよ」
『ケツイ充填！　ＤＥＴＥＲＭＩＮＡＴＩＯＮ　ＷＡＶＥ!!　ザバザバザバザバザッバーン！』
最初に戦いに身を投じた時点ですでにケツイは固まっている。
一片の揺るぎもなく。
「ケツイを抱いて……ブッ潰す」
・
・
・
戦いの後に残るのは何もない。
「ごめん、これ届けてくれる？」
「……」
「後悔なんて、しても、したりない…な」

「……助けた、わけじゃないから」
いつだって、最後にはそうなるに決まっている。

「へへ……まぁ、こうなるよな」
ただ、戦いに身を投じれば早まる。ただそれだけ。
「じゃあ、後は任せたぜ」

そうして、戦士たちの想いは継がれる。
「――最初で最後の、戦いを始めよう」
「――託されたんだ。絶対に、負けない」
”ＲＩＤＥＲＴＡＬＥ”近日公開!?
するはずがない。

Ｐルート

分岐条件

前にも書いた気がするが、一応。チャートとしては

過去に着いた時点で幸運クリティカル（地上シーンの行動制限がなくなる上に視聴用の機械がぶっ壊れる。失敗だと半分、ファンブルだと更に半分）

Ｃｈａｒａの好感度を上げまくる（足りないとこの先で強制的にソウルを求められる）

地下でのＣｈａｒａ及びＡｓｒｉｅｌへの説得でのクリティカル（Ｐであれば普通に暮らしてればよし）

以上がＰ、Ｇルートの共通チャートになります。

当然何か狂えば強制Ｎルートなのでクリティカル失敗したら即刻リセしましょう。あ、元の世界ごとですよ？

じゃないとＢｅｌｌだけちゃんと覚えてるってことになりますからね。そこは本当に注意しましょう。チャートが狂います（５敗）

――Ｂｅｌｌは、Ｃｈａｒａに復讐を諦めるように説得した。

途中からＡｓｒｉｅｌも加わり、二人でＣｈａｒａを抱きとめることでＣｈａｒａの知らない愛情を与えることにした。

「……、わかった。二人がいるなら、私は諦めるよ」

手に持っていた花を手放して、Ｃｈａｒａも二人の背へ腕を回して抱き返す。

その日、三人は本当の意味で家族になった。これまで少し距離を置いていたＢｅｌｌも歩み寄るようになり、非常に仲睦まじく暮らしていくのだ。

［＊Ｂｅｌｌ　ｉｓ　ｌｏｓｔ　ｔｈｅ　Ｄｅｔｅｒｍｉｎａｔｉｏｎ］

それから時がたち、９人目のニンゲンが落ちてくる。
出迎えてくれるのは金色の花の絨毯と、それを見に歩いてきたニンゲン２人とモンスターが１人。
「……？」
「「Ｈｏｗｄｙ！」」
「……」
声を揃えて落ちてきたニンゲンに声をかけるが反応はない。
そのことに三人組はひそひそと流行が終わってしまったのではないか、などと相談をするが傍から見たら可笑しな行動でしかない。
けれど、これができるのもすべて三人が本当に家族になったからだ。
「あー、えっと…じゃあ、改めて。ボクはＢｅｌｌ」
「僕はＡｓｒｉｅｌ！　この地下世界の王子様（プリンセス）なんだよ！」
「君みたいな泣き虫じゃ、あの隊長は付いてこなさそうだけど……っと。私はＣｈａｒａ。よろしく」
僕は泣き虫じゃない、というＡｓｒｉｅｌの講義を無視してＣｈａｒａはニンゲンに手を差し出す。
それを見ていた二人はまたかという顔をするが落ちてきたニンゲンは気づかない。
グチュッ、文字にするとそう形容するほかない音が響いた。
ニンゲンは気持ちの悪いものを掴んだように顔を歪めている。それをみてＣｈａｒａは盛大に笑う。見ていた二人も仕方ないとでも言いたげな様子ではあるが、笑っている。
「ふふ、中にスライムの入った袋を仕込んであるのさ。中々画期的だろう？」
「前はスライムそのままでママに怒られてたよね」
「うん。まだあきらめてなかったんだね」
順にＣａｒａ、Ｂｅｌｌ、Ａｓｒｉｅｌの順である。ついにＢｅｌｌもＴｏｒｉｅｌ、Ａｓｇｏｒｅを親として認めてママ、パパと呼ぶ

ようになっていた。
　二人の言葉にＣｈａｒａはほんの少し顔を赤くしながら講義しているが、Ａｓｒｉｅｌは少し怯え、逆にＢｅｌｌは言葉巧みに飄々と躱している。
「ところで落ちてきたニンゲンの案内が必要じゃないかな？」
「……帰ったら覚えてなよ」
「ハハ」
「ね、ねぇ…落ちてきたニンゲン、いないんだけど」
　遺跡の中に素っ頓狂なニンゲンの叫びが二つ響いた。
　落ちてきたニンゲンはその後Ｂｅｌｌ以降に落ちてきた６人のニンゲンによって地下世界を案内されました。ちゃんちゃん。

［＊Ｄｏ ｙｏｕ ｔａｋｅ ｔｈｅ ”ＴＲＵＥ ＲＥＳＥＴ”？］

……本当に来ちゃったんだね。まぁ、しょうがないか。キミたちってのは好奇心の塊だもんね。けど、後で後悔しないでよ？

分岐条件及びチャート

過去に着いた時点で幸運クリティカル（地上シーンの行動制限がなくなる上に視聴用の機械が壊れる。失敗だと行動時間半分、ファンブルだと更に半分）

Ｃｈａｒａの好感度を上げまくる（足りないとこの先で強制的にソウルを求められる）

地下でのＣｈａｒａ及びＡｓｒｉｅｌへの説得でのクリティカル（■■■■なのでこの後行動が必要）

以上がチャートになります。
当然何か狂えば強制▲ルートなのでクリティカル失敗したら即刻●セしましょう。前も言ったけれど、元の世界ごと。
じゃないとＢｅｌｌだけちゃんと覚えてるってことになりままままま。そこは本当に注■しましょう。■ル■トの内容が本気の皆殺しになりｋねませｎ（リセするたびに５％確率上昇）

――Ｂｅｌｌは、Ｃｈａｒａに復讐を諦めるように説得した。
途中からＡｓｒｉｅｌも加わり、ＡｓｒｉｅｌがＣｈａｒａを抱きとめることでＣｈａｒａの知らない愛情を与えることにした。
「……、わかった。私は諦めるよ」
手に持っていた花を手放して、ＣｈａｒａもＡｓｒｉｅｌの背へ腕を回して抱き返す。
Ｂｅｌｌは少し離れたところからそれを見ていた。互いを幸せにするために努力するであろう二人を見て、邪魔者を消すケツイに満たされる。
［＊Ｂｅｌｌ　ｉｓ　ｆｉｌｌｅｄ　ｗｉｔｈ　Ｄｅｔｅｒｍｉｎａｔｉｏｎ．］

それから、いくばくかの時が流れた。ニンゲンがこれまでに６人落ちてきたが、その全員が何かしらの事故で亡くなってしまった。
死体はすべてＮｅｗＨｏｍｅ近くの棺桶に入れられて、保管されている。
忍耐の心を持ったニンゲンは体中傷だらけだった。勇気を心に秘めたニンゲンは川で溺れたらしかった。誠実な心を体現したニンゲンは心臓に穴が開いていた。不屈の心を貫いた少年は首が裂かれていた。親切な心をしたニンゲンは自分で死んだそうだ。正義の心を

抱いたニンゲンは見られる姿ではなかった。
全員、どこからかＢｅｌｌがＮｅｗＨｏｍｅへ運んできて、棺桶を作って中に入れた。
死んだ同族（ニンゲン）を運び、棺桶に入れる。その行動を度々繰り返すようになって、Ｂｅｌｌはあまり話さなくなった。ＣｈａｒａやＡｓｒｉｅｌが話しかけても気が付けばフラリと消えていた。
いつの間にか消えた、そうとしか考えられないほどにＢｅｌｌはいなくなるのが上手かったし、二人もまたか、で済ませていた。

Ｂｅｌｌは一人で生い茂る木の中の一つの枝に座り込んで、いつもＨｏｍｅへと続く扉を見つめていた。見張りの仕事をしているわけでもないのに、いつだってそこを見ていた。
そしてニンゲンが現れると決まって一番に話しかけていた。
この日もまた、ＢｅｌｌはＨｏｍｅへ続く扉を見つめていた。そしてＢｅｌｌの座っている枝の大本である木の傍に影が差す。
「Ｈｅｙ ｋｉｄ．Ｗｈｙ ａｒｅ ｙｏｕ ｄｏｉｎｇ？《なぁガキンチョ。なんだってそんなことしてるんだ？》」
「Ｓａｎｓか。……さて、ね」
じっくりと考えてから出てくるのはどうしようもない誤魔化しの言葉。しかし、いつもなら手を引くＳａｎｓもなぜだか今日は引かなかった。
「Ｉ ｋｎｏｗ ｙｏｕｒ ”Ｌ．Ｏ．Ｖ．Ｅ．” Ｙｏｕ ｋｎｏｗ ｔｈｉｓ ｍｅａｎｉｎｇ，ｒｉｇｈｔ？《オイラはあんたの”Ｌ．Ｏ．Ｖ．Ｅ．”を知っている。この意味…分かるよな？》」
「なんでＬ．Ｏ．Ｖ．Ｅ．がわかるのかは聞かないけど……。うん、もちろんわかるよ」
Ｓａｎｓは青く輝く瞳をＢｅｌｌに向けているが、それでもＢｅｌｌの態度は変わらない。
「もし、」

言い終えたはずのＢｅｌｌが話し始めてＳａｎｓは思わず一層警戒を深めて睨みつける。けれどその語り口に揺らぎはない。
「もし、７つのニンゲンのソウルを手に入れることができたらモンスターは神に等しい力を得られる」
それは、最近の学術で発表された事柄であり、その道について学んでいれば誰でも知っていることだった。
「神に等しければ、当然バリアだって壊せるし、なんなら世界を作り直せる」
そこまでは誰も言っていない。けれど妙な説得力があるとＳａｎｓの頭が訴えかける。危険だと本能が叫ぶが、攻撃はできなかった。
「今までに集めたソウルは６つ。……Ｃｈａｒａが悲しむからそうしていないだけで、別にボクのを使っても構わないんだ」
「Ｈｅｈ… ｎｏｗ ｕｎｄｅｒｓｔａｎｄ ｗｈａｔ ｓａｙ ｙｏｕ… ｙｏｕ ａｒｅ ｃｒａｚｙ.《ハッ…なるほどそういうことか。……あんた、狂ってるな。》」
「ハハ…理解はしてるさ。けど、ボクの目的はＣｈａｒａの幸せだからね」
苦笑いしながらＢｅｌｌは言葉を返す。その顔が演技であるようには見えない。もしかしたら、そんな考えがＳａｎｓの頭に浮かぶ。だが、ＢｅｌｌのＬ．Ｏ．Ｖ．Ｅ．が上がっているのも事実だ。
「Ｏｋａｙ，Ｉ ｏｎｌｙ ｓａｙ ｔｏ ｙｏｕ…”Ｄｏ ｙｏｕ ｗａｎｎａ ｈａｖｅ ａ ｂａｄ ｔｉｍｅ?”《そうかよ。『オレと最悪な一時を過ごす気はあるのか?』…とだけ言っておくぜ》」
「ハハ…。ないよ、そんなつもりは。あり得るのはボクがＣｈａｒａの役に立つための『最高の一時（Ｔｈｅ ｂｅｓｔ ｔｉｍｅ）』だからね」
「Ａｈ…（あー）Ｉ，ｍ（手）ｓｏ（遅れ）ｌａｔｅ（みたいだな）.」
Ｂｅｌｌはその言葉に笑いかけるだけだ。すでに、目的は果たされているのだ。
あとはもう一つ手に入れば自分もＣｈａｒａの幸せを見ていられるというだけ。手に入らなくとも、Ｂｅｌｌ自身が『そうなる』だけ。

最終的にＣｈａｒａが幸せになれることに変わりはない。
「アハハ、アハハハハハハハハハ！　こんなにも薄汚いニンゲンなんかのソウルであれほどに綺麗なＣｈａｒａが救われるなんて、本当、世の中って面白いよね」
　Ｓａｎｓはもうすでにその場にいない。残されたのはどうしようもなく狂ったニンゲンの笑い声だけだ。

ほんとにほんとの作者さんの独り言（見たくない人は見なくてよし）

安定しないルビ
英文を「」に入れてルビ入れると表示されたりされなかったりしてる……
ぐぬぬ、「」が悪さをしているのか？
でも今更変えるのもなぁ…って感じ
わざわざアンケートとった理由及びなぜGルートを投稿したのか
アンケートは投稿する順番を決めるためのもの。
ＡＵが１番ならＡＵが真っ先になってた。（Ｐ、Ｇに影響なし）
ＰとＧは投票数の多いものが先。ただし両方とも２桁に突入したら同時投稿にする予定だった。
このＰ、Ｇだが、Ｇの方が投票数が多ければＧルートが先になり、その後のＰルートは原作で言うところのソウルレスルートに進む予定で、実際に書いてありました。ボツになったので消しましたが。
一応軽く差異点を上げると［＊Ｂｅｌｌ　ｉｓ（　　）Ｄｅｔｅｒｍｉｎａｔｉｏｎ］のカッコの中身が変わってます。カラータグとか他にもあるけど基本はそんな感じ。
Ｐではｌｏｓｔ、Ｇではｆｉｌｌｅｄ　ｗｉｔｈ、ソウルレスではｂｅ　ｂｒｏｋｅｎになります。
そんでそのカッコの中身を元に先を書いて行った感じですね。
あ、一応チャートも変わってましたね。
ソウルレスでは「リセットを押してから今度は流れに身を任せましょう」ってなる予定でした。
本文の流れ？
それを知りたい人はよっぽど好奇心旺盛なんだね。
でも残念、教えることはできないよ。なにせ存在しないルートなんだからね。

ーこの場をお借りしてー

このＳＳに評価をつけて下さった御二方、本当にありがとうございました。特に星１０の評価を下さった『行方不明者Ｘ』様は同じくＵＮＤＥＲＴＡＬＥのＳＳを投稿しております。自分も自信を持って星１０を押すくらいには素晴らしい作品を書いてしらっしゃいますので、これをご覧の皆様もお読みになってみては如何でしょうかって言おうとしたんですけど考えてみたら「言われるまでもなく見た」って人しかいなさそうだって行き当たりましたなんかごめんなさい。

えっと……質問あればなんでもどうぞ。感想欄でもメッセージでも、答えようと思います。

……綺麗な感じで終わらせておいてなんだけど、実はあと４００文字ほど書かないと投稿することが出来ないんだ。いや、この文もあるから正確にはもう少し少なくて……って、こんなこと書いてたらいつまで経っても終わらないか。

とにかく、あと３００文字程度、付き合う必要はないから、ブラウザバックしてな。

なんで見に来るかな……いや、もう本当に何も無いんだって。ソウルレスルートはバックアップも取ってないから大まかな流れくらいしか覚えてないんだよ。

あ、戻ってこの場をお借りしてを書いてたら超えたわ。
じゃ、読んでくれてありがとね！

……おいおい、ここまで見に来たのかい？残念だけど、これは作者が悪ふざけで改行しまくっただけだぜ？
その証拠にこの下には意味の無くなったアンケートがあるだろう？
バカだね、キミは。「何も無い」って言ったし、別れの挨拶もしたのに態々スクロールするなんてさ。
まぁ、そこまで深読みさせる「何か」がこんな作者にあるって言ってくれるのなら、それは嬉しいんだけどね……。
あぁ、余計な事だったよね。ごめん。それじゃ、今度こそ。
ここまで読んでくれてありがとう。騙すような真似をして本当に

ごめんなさい。

ＳｔｏｒｙＳｈｉｆｔ ～ Ｗｈａｔ ｔｈｅ ｍｅａｎｉｎｇ ｏｆ ”Ｂｅｌｌ” ？ ～

これは、ありえたかもしれない並行世界（Ａｌｔｅｒｎａｔｅ－Ｕｎｉｖｅｒｓｅ）の物語。
間違っても、同一視なんてしてはいけない世界。

独り、木の上でＢｅｌｌは白い息を吐いていた。そこに大きな意味はない。ただいつも通りにそこにいるだけだ。
この世界は、Ｂｅｌｌの本来の世界ではない。そのことには誰よりもＢｅｌｌが気が付いていた。だからこそ誰にも気づかれることなく、しかし監視のできるそこで一日を過ごしていた。
どうやら、この世界ではＢｅｌｌの世界とはモンスターたちの歩みが大きく違っている。もっとも、その性格までは変わっていないようだが。
しかしなによりも大きな差異点は……。
「やぁヒューマン。そんなところでなにをしてるんだい？」
「……別に、何も」
「それじゃあこっちに来て一緒に遊ぶのはどうかな？」
「……」
目の前にいる紛い物だ。目の前にいるコイツはＣｈａｒａＤｒｅｅｍｕｒｒを名乗っている。いや、実際にこの世界でもそうなのだ。
しかし違う。目の前にいるこの存在はこの世界のＣｈａｒａＤｒｅｅｍｕｒｒであってＢｅｌｌの知るＣｈａｒａではない。
確かに性格は同じだ。ＡｓｒｉｅｌＤｒｅｅｍｕｒｒと仲良くしていることだって同じだ。けれどすべてが違う。
気にするべきではない細かな違い。よく似ているだけその違いが際立ってしまう。だからこそＢｅｌｌは目の前の存在を許すことができないでいた。

「あーあ。せっかく見つけたヒューマン(同族)なのに……」
「……」
Ｂｅｌｌがどれだけ雑に扱ってもこの世界のＣｈａｒａＤｒｅｅｍｕｒｒは依然として仲良くしてこようとする。
この世界のＣｈａｒａＤｒｅｅｍｕｒｒはすでに幸せだ。だからＢｅｌｌの出る幕はない。出てはいけない。
へたにＢｅｌｌが手を加えて、そのせいでＣｈａｒａＤｒｅｅｍｕｒｒという存在が不幸になることはあってはいけない。当然の摂理だ。
「幸せな存在を幸せにすることはできないんだから……」
「ん？　何か言った？」
「……何でもない。早くいかないと弟クンが心配するんじゃないか」
「それもそうだね。次は来てもらうからねー！」
それだけを言い残してＣｈａｒａＤｒｅｅｍｕｒｒは颯爽と走り去っていく。きっと弟クンの……ＡｓｒｉｅｌＤｒｅｅｍｕｒｒの言葉に顔を赤くしながらも遊んで、遊びつくすのだろう。
その中にＢｅｌｌは入ってはいけない。今のＢｅｌｌはＢｅｌｌＤｒｅｅｍｕｒｒではない。ただのＢｅｌｌだ。
「辛い……わけがないよね」
だってＣｈａｒａＤｒｅｅｍｕｒｒは幸せに暮らしているんだから。
そう呟く言葉はどうしようもなく自分に向けられたものだ。
すでに姿の見えないＣｈａｒａＤｒｅｅｍｕｒｒにその言葉は届かない。届く可能性があるのはかの遺跡に続く扉を開いて出てきた塵まみれのニンゲン(ヒト擬き)だけ。
Ｂｅｌｌはその存在の前に今日も立ちふさがる。この世界に行きついてしまってから何度目かは忘れた。数えるだけ無駄だから。そうしてまた、決まり文句を言って出てきたソイツを殺す。
「やぁ。いい加減このルート(L.O.V.E.)は諦めたら？」
Ｂｅｌｌがこの世界でＤｒｅｅｍｕｒｒ(夢見る者)と成れたのは一度だけ。
それ以降のこの世界では、ずっとＢｅｌｌ(警鐘)のままだ。

Ａｍａｌｇａｍａｔｅｓ

ソレは薄く目を開いた。しかし目に光が入ってくることはない。そこは完全な暗闇で支配されていて、絶対に出ることはないのだから。

何か夢を見ていたソレは目をこすり、体を伸ばして起こす。

ヒトの形をしたソレは、ニンゲンではない。

ケツイと塵によって創られたＲｅａｌ（本物）Ｍｏｎｓｔｅｒ（化け物）だ。しかしソレは他と違いより多くのケツイを注がれた。そのせいでニンゲンであった頃のケツイの欠片が、ソレをソレたらしめている。

Ｎａｍｅｌｅｓｓ（名前もなく）、Ｍｅａｎｎｉｎｇｌｅｓｓ（意味もなく）、しかしそれは確かに存在している。

「――――――――――」

そうして、人ならざる者は声を上げる。言葉として意味をなさないソレの言葉は、しかし確実に響いている。

そのときふと一筋の光が差し込んだ。この場所は他ならぬソレ自身がかつて創り上げた秘密基地だ。本来ならば絶対に人は来ないはずだ。

ソレは、少ししてから光の方へ顔を向ける。元の体から大きくかけ離れたその体も、これまでの無駄に長い時間で慣れ切ってしまっている。けれどこのところは体を動かさずにずっと眠っていたせいで体はなまりきってしまっていた。

「――――――――――」

もう一度、声を上げる。けれど光の先にいる何かにとってその声は意味をなさないただの音だ。

だからこそ、音の聞こえた方へ向かう。向かってしまう。

光の先から現れたのはニンゲンだった。縞模様の服を着た子供だ。

しかしソレにはもうまともな視力は残っていなかった。見えるのは白と黒で塗り分けられただけの世界をソレは見ていた。

「――――」

ソレは確かに歓喜した。

――かつての理由だ。
――存在する理由だ。
けれどソレに未だに名前はない。けれど意味は思い出すことができた。守ることだ。目の前にいる子供の幸せを。
「――C―Δ――――r――――∀――――」
遠い昔に知って、未だに忘れていない名前をろくに動かせない喉で発声する。静かに這いずり、光を受けて銀色の瞳が確かに輝く。
銀色の瞳にまたケツイが灯る。姿が改めて映し出される。ヒトの形をして、頭には三角形の耳があり、ニンゲンでの尾てい骨に当たる位置からちょろちょろと動く尻尾が生えていた。
――――――さて、シリアスだって？　そんなの　お断りだ！
有り体に言おう。ソレとはＢｅｌｌである。そしてＢｅｌｌにはネコミミとネコのしっぽが生え、まさに獣人ともいえる姿になっていた。
「うー！・　うー！・」
Ｂｅｌｌはニンゲンに甘えるように飛びつき、すりすりと頬をこすり合わせる。そうされているニンゲンは困ったように笑って、ゆらりゆらりと上機嫌に揺れるしっぽを思い切り掴む。
「フニュッ!?!?」
ピンと体を硬直させてＢｅｌｌは離れる。耳は倒れ、しっぽも心なしか元気が無いように見える。
それを確かめたニンゲンは薄く笑みを浮かべて頭を撫でる。Ｂｅｌｌはゴロゴロと喉をならして上機嫌になっていく。
ニンゲンは確かに笑っている。
けれど、その体は逆光になっていて陰でしか判別できない。Ｂｅｌｌもまた、モノクロの世界にいるせいでそのニンゲンを判別することはできない。
確かにそこにいるのはニンゲンだ。ただしＢｅｌｌの求めるその存在ではない可能性もある。すべては確かな観測をするまでわからない事実であり、確かめる術のない話だ。

ニンゲンはＢｅｌｌが微睡に囚われたことを確認してから外に出て、また扉を閉める。こうしてＢｅｌｌは再び眠りにつく。次に目覚めるのは果たしていつになるのだろうか。

ＵｎｄｅｒＳｗａｐ！「ｓｗａｐｐｉｎｇ　ｔｈｅ　ｗｏｒｌｄ：（」

ふぅ、と息を吐き出す。

別に疲れるようなことをしたわけじゃない。ただ少し困った。それだけだった。ボクは真っ暗な空間に座り込んでその画面を見ている。

完全なまでの真っ暗闇。その中で見えるのは彼女の視界だけ。そのくせ後ろからナニカに見られている感覚が付きまとう。

正確には、見られているのはボクじゃない。けれどこの感覚はボクにだけ襲っているようだ。そのせいで誰かに言うこともできず、途方に暮れる。

「まぁ、そもそも誰にも話しかけることなんてできないんだけどね」

へッ、と鼻で笑う。どういうわけかここにいるが、ボクはボクのままだ。しかしこの世界のみんなは入れ替わっている。Ｓａｎｓがなぜか弟であるはずのＰａｐｙｒｕｓのような性格になって、そのＰａｐｙｒｕｓはＳａｎｓのような怠け者…怠け骨になってしまっている。

結局今の今まで何もわかってはいない。けれどこの世界はそうなんだと考えることにした。

「ああ、またか」

仕方のないことだってことくらいわかっている。何も言わずにできる方がおかしいのだ。

ぼーっとこの暗い世界を見渡すのにも飽きていたけれど、何度もこうするのは気が滅入るというものだ。しかしこうしなければ彼女が壊れてしまう。

「彼らはべつにどうだっていいだろう？　キミは悪くなんてないんだぜ？」

ハハハハ！　と大きな声で笑う。彼女は頭を押さえてうずくまったようだ。そりゃあ、頭の中から耳障りな音がしたら誰だってそうす

るだろう。
そう、ボクがいるのは彼女の頭の中とでも言うべきところ。そりゃそうだ。ボクは死人なんだから、体なんてあるはずがない。
けれど……ボクのケツイが、ボクという存在が消えることを許容しなかった。
結果としてケツイだけの化け物（モンスター）としてボクは生き延びている。いや、死ねないでいる…と言うべきか。
ともかく、ボクにできるのは塵で汚れてしまう彼女の精神を守ることだけ。
どうしようもなく操られて、それでも情けをかけることを諦めようとしない彼女は相当に決意が固い。けれどそれではやがてケツイ（ココロ）を砕いてしまう。
だからボクは……ボクが、悪魔となって彼女の精神を壊れないように調整している。
もう何度目かも忘れてしまったこの世界でも彼女は情けをかけようとして、それでも決して自分の意志では体を動かすことができず、ボクという存在を追い出そうとする。
仕方のないことだと思うし、実際にそうするべきなのだ。彼女の中にボクがいていいことなんて一つもない。
本来は一つの肉体には一つだけタマシイが存在しているべきなのだ。間違っても二つなんて抱えていい数じゃない。
けれどどうしようもなくてボクも彼女もその点は諦めた。代わりに彼女は情けをかけることにより専念し、ボクは操ってくる奴の正体を探っている。
それはどうしようもなく遠い糸だ。細くて、けれどピンと張っている。とてもではないが、力業で追う事なんてできない。
けれどそれは今までの話だ。今は違う。今なら……ここまで時間をかけたことで今ようやく届くようになった。
「覚悟しろよ……」
彼女へ際限なく注がれることになる非情の塊（EXPとLOVE）。ボクが代わりに受け止め続けたおかげでボクはこうして世界の理に反さない方法で規

格外と成れた。
「ボクが、直々にそこにいる君にＬＯＶＥを与えてあげるから…さ」
ようやくたどり着いた。
彼女もまた、この一周を終えた。タイミングは完ぺきだ。
「ほら、今も見てるキミに言ってるんだぜ？　じゃあ………消えろよ…
（」
999999999999999999999999999999
999999999999999999999999999999
999999999999999999999999999999
999999999999999999999999999999
999999999999999999999999999999
999999999999999999999999999999
999999999999999999999999999999
999999999999999999999999999999
999999999999999999999999999999
999999999999999999999999999999
999999999999999999999999999999
999999999999999999999999999999
999999999999999999999999999999
999999999999999999999999999999
999999999999999999999999999999
999999999999999999999999999999
999999999999999999999999999999
999999999999999999999999999999
999999999999999999999999999999
99999999999999999999999999999

Ｍａｒｒｙ　Ｘ，ｍａｓ！

「Ｃｈａｒａ！今日はクリスマスだよ！」
　ＡｓがＣｈａｒａに明るく声をかける。そう言えば今日は１２月２５日。確かにクリスマスだ。…けどサンタの登場は昨日の夜から今日の朝にかけてのはず…地下世界では違うのかな？
　そんな風にちょっと考え始めたボクとは違ってＣｈａｒａは冷静にＡｓに言葉を返していた。
「クリスマス……。ああ、もうそんな時期なのか。地下は季節が分かりづらいからな…気づかなかったよ」
「もう！　クリスマスを忘れるような悪い子にはサンタクロースは来ないんだよ？」
「だとしたらそこで考え込んでるＢｅｌｌも怪しいな」
　名前を呼ばれたので顔を上げてみると二人してボクを見ている。Ａｓは信じられない、と言いたげな瞳で。逆にＣｈａｒａはニヤニヤと悪戯を成功させたような笑みだ。
　二人の会話をあまり聞いていなかったこともあってとりあえず首をかしげてみるが反応はない。一体何の話をしていたのだろうか。
　しかしクリスマスとなると、Ｃｈａｒａは怪しいがＡｓは未だにサンタクロースの存在を信じていそうだ。まさかそれを教えるわけにもいかないし、とりあえず何でもないように過ごすとしよう。
「ああ、クリスマスって言えば……」
　Ｃｈａｒａにちょっとした手品を使ってボクからだってバレないようにプレゼントを贈ったことがあったっけ。ボクも子供だったからチョコレートくらいしか贈れていなかったけれど、今年はもっと豪華にいきたいな。
「Ｂｅｌｌ、クリスマスがなんだって？」
「……アハハ、思いついたことを忘れちゃった…」
「ＢｅｌｌってＣｈａｒａみたいに変なところで抜けてるよね～」
「私みたいにってどういうことだ、Ａｓ」
　ワーキャーと二人で騒ぎ始めたのをしり目にボクは考えを巡らせ

る。まぁ、けど一先ずは……。
「二人とも、ボクちょっとＳｎｏｗｄｉｎまで出かけてくるよ」
「いってらっしゃい！」
プレゼントでも、買いに行こうか。

時間はかなりたって、その日の夜。
ボクは二人のベッドの傍に立っていた。三人で一緒に今日はサンタクロースを見るまで起きていようとしていたけれど、二人は早々に寄り添いながら眠ってしまった。
そんな二人を写真に残せないことを嘆きながらも、ボクは買ってきたそれをそれぞれの枕元に置く。そうして二人の頭を撫でながら一つ言葉を落とす。
「Ｈａｖｅ（い） ａ（い） ｇｏｏｄ（夢） ｄｒｅａｍ（を）…」
少しくすぐったそうにする二人をもう一度だけ撫でて、ボクは自分のベッドにもぐりこむ。今日はいい夢を見ることができるだろうって確信を胸に。

次の日の朝、ボクはＡｓの絶叫でたたき起こされた。
「Ｃｈａｒａ！　Ｂｅｌｌ！　今年はサンタクロースが二人いるの!?」
「むぅ…Ａｓ、うるさい…もうちょっと寝させてよ…」
ボクよりも先に起こされたらしいＣｈａｒａが眠たげな目をこすりながら体を起こして、そして固まる。
「今年のサンタクロースは仕事が早いな」
ぼそりと呟かれた言葉だったが、ボクにははっきりと聞こえていた。どうやら、ボクのトリックは見破られていなくて、Ｃｈａｒａはずっとサンタクロースのことを信じていたようだ。……これからも見破られないようにしなければ。
「…って、サンタクロースが二人……？」
ボクの枕元を見てみればプレゼントが一つ。……それもそうだ。どうして気付かなかったのだろう。考えてみればボクが動かなくて

もママとパパが動いていたんだ。
けれど……だとしても。
「二人の笑顔を見れてよかったな……」
『二人の笑顔を見て来年もまた用意するというケツイを抱いた。』
……なんてね。